

# 週間感染症情報

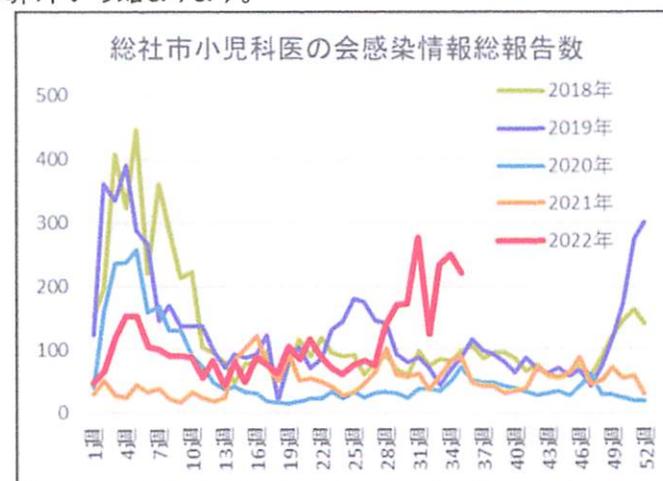
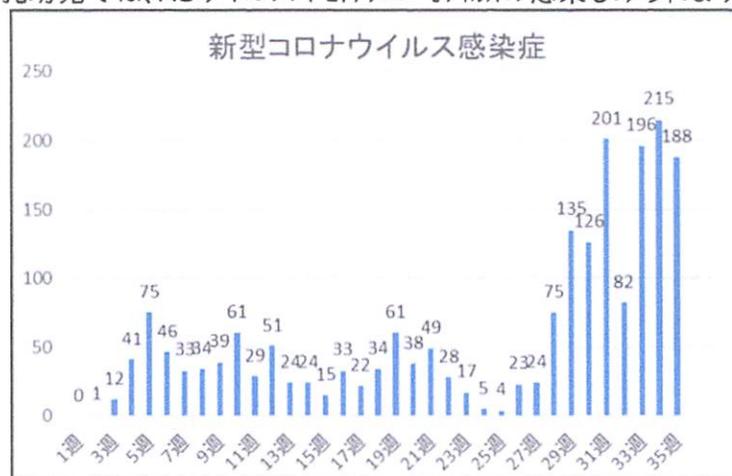
2022年32-35週 2022年8月8日より2022年9月4日まで

32週 33週 34週 35週

麻疹				
風疹				
水痘(みずぼうそう)				
ムンプス(おたふくかぜ)				
百日咳				
溶連菌感染症	1			
手足口病	3	4	6	3
ヘルパンギーナ				1
伝染性紅斑				
感染性胃腸炎	19	18	11	17
ロタウイルス(再掲)				
便アデノウイルス(再掲)				
突発性発疹				1
伝染性膿痂疹(とびひ)	1	4	2	3
ヘルペス性口内炎		1	2	
アデノウイルス感染症	4	3	1	1
RSウイルス感染症	9	3	4	1
マイコプラズマ感染症				
ヒトメタニューモウイルス	3	2	4	2
インフルエンザ				
インフルエンザ A				
インフルエンザ B				
新型コロナウイルス感染症	82	196	215	188

32-35週の4週間の報告です。左下のグラフの様に新型コロナウイルス感染症の報告数(内科の診断患者を含む)は32週はお盆休みのため減少していますが、200名前後と高い状態が続いています。右下のグラフは総報告数ですが、インフルエンザ流行時の報告数に匹敵しています。33-35週でのコロナの割合は85%前後です。山を越えたように見えますが、新学期が始まり小学生の感染者が増えています。感染力が強く、家族内感染で兄弟や保護者が感染しさらに地域内での感染が広がっています。小学生はほぼワクチン未接種です。高熱と頭痛などで発症し、数日で解熱して軽快治癒しています。ワクチン接種済の保護者は、咽頭痛・頭痛・倦怠感で発症して感冒との鑑別が困難です。インフルエンザと同様に、発症してすぐには検査で陽性にならないことも多いです。意識の低下・けいれんなどがある場合は急いで受診する必要があります。しかし、比較的元気で水分摂取もできている場合は、つらいようであれば手持ちの解熱剤などを使用してかまいません。翌日電話をかけて発熱外来を受診してください。

5歳から11歳までのワクチンが推奨になりました。多くの小児は軽症ですが、重症になったり、亡くなる方もあります。小児のワクチンの副反応(抗原量が大人の1/3)は少なく、重症化予防効果はあります。納得の上で接種して下さい。乳幼児では、RSウイルスやヒトメタニューモウイルスの感染もみられます。鼻汁から始まります。



(感染情報については当院のホームページでもご覧になれます。 <http://miyakenaika.com> )